5．資　料　紹　介

椿井大塚山古墳の謎を解く

1　はじめに

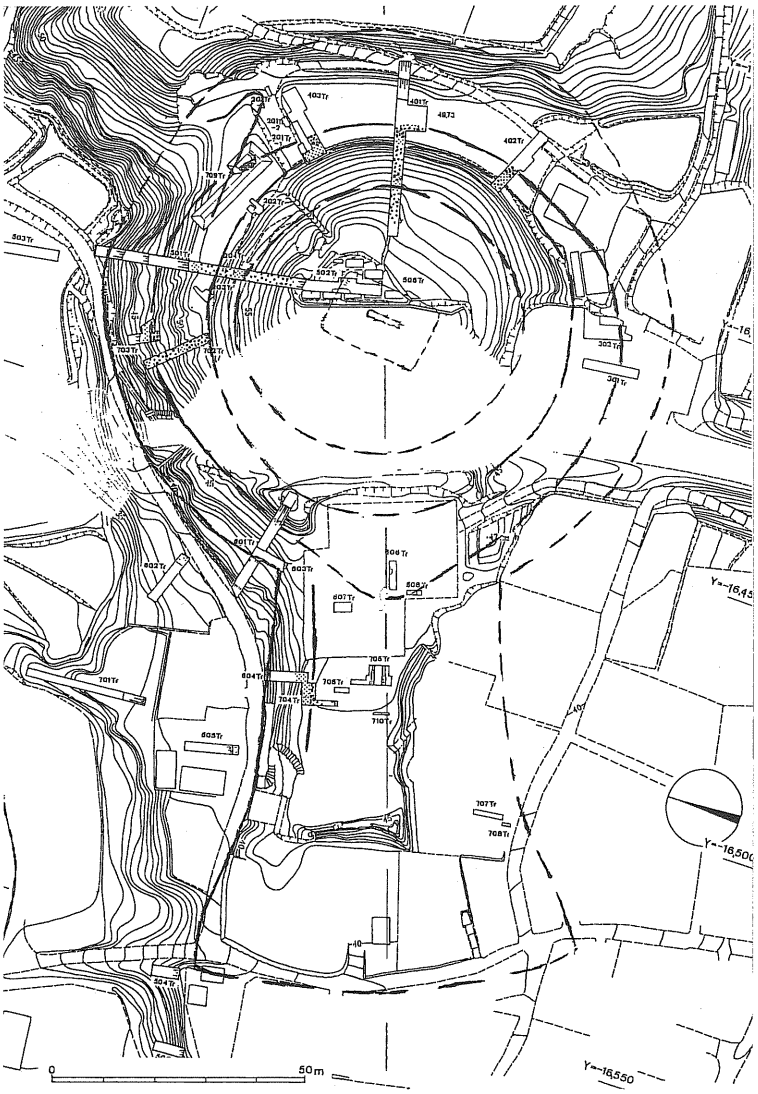
山背国最大の規模を誇る椿井大塚山古墳の墳丘については、前方部上には民家が数軒乗っていたり、後円部が鉄道路線によって切断されたりしているため、墳丘の全容を復元することがきわめて難しい古墳の一つと評価される。

本稿では、最新の発掘成果をもとに椿井大塚山古墳の設計と施工の実態を検証し、古墳本来の姿を解明してみることとする。

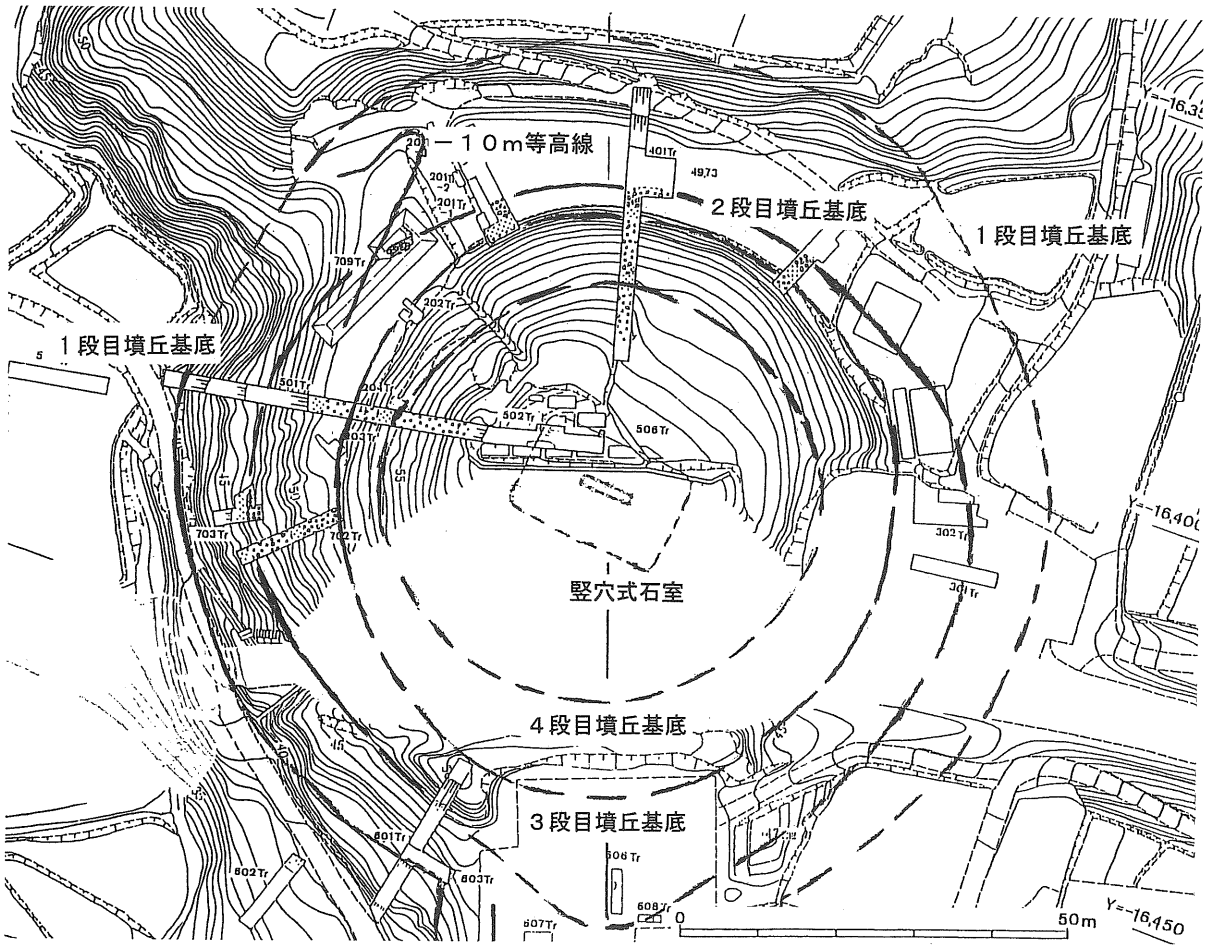
2　墳丘造営工事の特徴

第1図は平成11年に山城町教育委員会から刊行された報告書に掲載された測量図に墳丘基底線、各段築の基底線などを書き込み、JR奈良線の線路と法面の等高線を消すなどの改変を加えたものである。この図によると、古墳の北側から西側を走る里道が、古墳の外形をよく留めているものと思われる。古墳の墳丘基底は、後円部ではこの里道のすぐ南側、標高40m等高線付近のほぼ水平面に設定されていることがわかる。この付近での墳丘基底線のカーブと竪穴式石室の推定中心点とをもとに反転復元すると、後円部径は約110mとなる。前方部についても、この里道がある程度墳丘の外形を留めているものと推定される。三味線バチ形の平面形を呈し、前方部前端線は直線ではなく弧状にめぐることなどが、昭和28年の第1次調査以来指摘されている。墳丘基底線は、くびれ部付近で標高41m前後、前端線で標高38m前後の西に向かってなだらかに下がる緩斜面となっている。前方部前端線を里道の東側に求める学説もあるが、丘尾切断工法による古墳の通例として平野部側の墳丘基底をより低く設定し古墳をより大きく見せる工法を採っていることが多いことから、私は通例に従い里道の西側に求めた。墳丘は後円部が4段築成、前方部が2段築成になっていることを、すでに平成4年に指摘したが、この点については後に山城町教育委員会が実施した範囲確認調査によって追認された。

第2図は、第1図の後円部付近を拡大したものである。町教委による範囲確認調査で



第１図　椿井大塚山古墳墳丘復元図

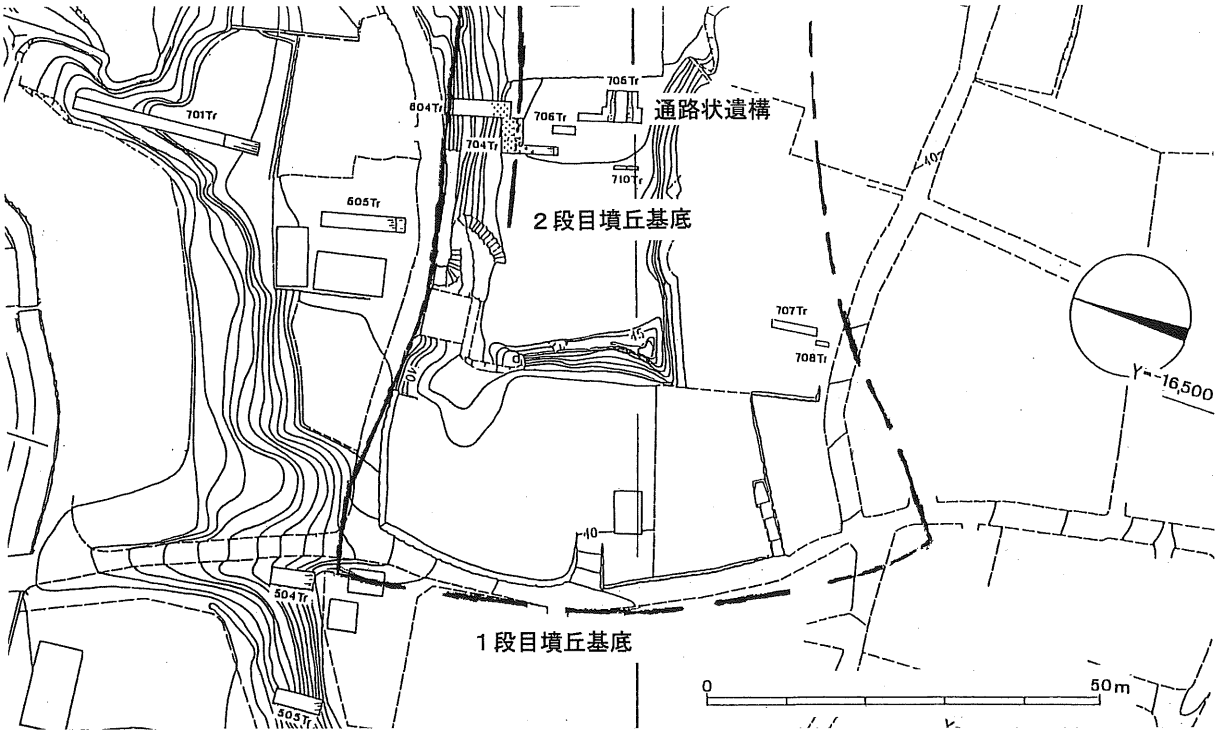


第２図　椿井大塚山古墳後円部墳丘復元図

第３図　昭和28年に測量された溝状遺構

得られた最大の成果は、後円部上段墳丘（３・４段目）の東側を弧状にめぐる平坦地に設定された４ヶ所のトレンチから、後円部２段目の墳丘基底を示す葺石が新たに検出されたことである。この発見により、後円部2段目の墳丘は南北90m前後、東西85m前後のややいびつな円形であることが判明した。町教委はここで検出された葺石を墳端と認定し、前方部里道西側に設定された推定墳端とを結んだ古墳の全長を175mとされたが、これは過小評価である。後円部の墳丘基底は、2段目の段築基底ではなく1段目の墳丘基底の動向をもとに後円部径を決定し、全長を決めるべきだと考える。

この問題を解く鍵は昭和28年に小林行雄博士が測量し報告書に掲載された、精度の高い地形図(第３図)の中にある。第3図の右上



第４図　椿井大塚山古墳前方部墳丘復元図

方、矢印で示した地点付近から北西方向に開口する谷状地形が表現されている。図でみるかぎり、この谷の開口方向や谷底の流れは、想定される後円部の外周ライン上にほぼ乗っており、この谷状地形が自然の開析谷ではなく古墳の造営に伴って開削された、古墳時代の遺構である可能性が高いことをしめしている。すなわち、この谷状地形の南西側斜面を後円部１段目の墳丘、谷底を墳丘基底の遺構と認定してよいと思われる。こうしてみると、後円部の墳丘基底は、里道に沿ってめぐっていた北側から第３図の矢印地点付近までの間は、急傾斜の斜面を駆け上がるように施工されたことがわかる。残念ながら、この谷状地形はその後の竹林の日常管理によって地形改変が進み、現在は地表面にあまりその痕跡を留めていない。そこで昭和28年の地形図から－10m等高線のみをトレースし転写したものが、第1・2図に加筆したU字状の線である。この谷状地形の東側には、法幅約10m・高低差約８ｍを測る切り通し状地形がみられるが、この切り通し状地形もまた古墳時代にまでさかのぼる土木工事の跡であることは疑う余地がない。私はこの切り通し状地形の上肩ラインからその南に続く傾斜変換線が、後円部中心点から計測して半径55mライン上に乗っていることから、後円部の外形線に沿うようにして切り土工事の線引きが設定されたと想定している。

第４図は第1図の前方部を拡大したものである。墳丘は発掘調査で葺石の基底部が確認されているので、二段築成であることはほぼ間違いない。このほか、前方部墳丘の中央部に設定された試掘トレンチから東西方向にのびる通路状遺構も検出された。この遺構は墳丘築成工事の途上で構築され、その後盛り土の中に埋め込まれたもので、工事用の仮説道路の遺構と考えられる。

町教委はこの遺構を古墳の中軸線を示す盛り土遺構と評価されたが、検出状況等から判断してきわめて可能性の低い想定と思われる。前方部の幅が確定した上でこの遺構が前方部の中央部付近で検出されたなら、ある程度の可能性があるが、この遺構を唯一の根拠に前方部幅を推定するのは本末転倒といわざるを得ない。

3　相似墳はどれか

椿井大塚山古墳の墳丘を築造するに当たって準備された設計図は、全長193m・後円部径110m・前方部幅76mを測るものであったと推定される。前方後円墳を比較研究する際には、この当初の設計図を確定することが研究の成否を左右する重要な鍵となる。さらに、墳丘の測量図を中軸線で半切したものを突き合わせて比較検討する際には、漠然と全長をあわせるのではなく、後円部径を厳密に縮尺調整した上で前方部の各部の形状を対比する必要がある。

椿井大塚山古墳の墳丘については、奈良県箸墓古墳を縮小した相似墳とみる研究者が多いが、いずれも上記したような厳密な比較検討作業を経たものではなく、箸墓古墳に一歩でも近づけたいとの先入観に導かれた所論と推察される。

私が比較検討した結果は、第5図に示すとおり、椿井大塚山古墳の相似墳は奈良県中山大塚古墳、墳丘の規模は椿井大塚山古墳を三分の二に縮小したものが中山大塚古墳とみられる。

第５図　椿井大塚山古墳と中山大塚古墳

4　おわりに

椿井大塚山古墳は、山背南部を治めた初代の王墓である。出土した32面以上を数える三角縁神獣鏡の同笵鏡の分布状況などから、その被葬者は、初期大和政権が淀川・瀬戸内海水系をおさえて勢力を西方へ伸ばしていった際に、きわめて重要な役割を担った人物であったと考えられている。

墳丘については、検討の結果全長193m・後円部径110m・前方部長83m・前方部幅76mという規模を推定復元した。前方部は先端部付近で大きく開く三味線バチ形をしているのがこの古墳の特徴である。この墳形を厳密に比較検討したところ、大和盆地東南部にある中山大塚古墳と設計図を共有していることがわかった。同じく大和盆地東南部にある箸墓古墳も、三味線バチ形前方部をもつ巨大古墳として、またわが国最古の前方後円墳として広く知られている。椿井大塚山古墳の相似墳が、箸墓古墳ではなく中山大塚古墳であるのはなぜか。

椿井大塚山古墳の築造に当たって準備された設計図は、箸墓古墳成立後に、大和の大王権を支えるクラスの墳形モデルとして、大和で編み出されたものがこの地にもたらされたと考えている。

１）山城町教育委員会1999『椿井大塚山古墳』
２）樋口隆康1998『昭和28年　椿井大塚山古墳発掘調査報告』山城町
３）奥村清一郎1992「椿井大塚山古墳の設計図」『長岡京古文化論叢Ⅱ』中山修一先生喜寿記念事業会
４）京都大学文学部考古学研究室1989『椿井大塚山古墳と三角縁神獣鏡』京都大学文学部
５）奈良県立橿原考古学研究所1996『中山大塚古墳』

（奥村　清一郎）